「はぁッ　はぁッ　はぁッ――――まずいッ」

家を飛び出て数分後、まともに息継ぎをせず走り続けた僕は腕時計を見て発狂する。待ち合わせの約束が確か正午頃。受け入れられない現実に、もう一回時間を覗き見る。そこに記された短針は、僅かな希望を打ち砕くように、遅々と動いた。

正午から約二時間半。

僕は十四時三五分と記された時計針に、またがむしゃらに足を動かした。
何故こんなにも約束した時間から離れているのか。
警察官の尋問の如く、理性が僕を詰問する。

理性：どういうことだ？　昨日は約束のため早く寝たはずだ。何故こんな結果になる？
僕：はい！　弁明すると、明日が楽しみすぎて寝付けなかった事が原因だと思います！
理性：ふむ。であれば何時ごろに寝られたのか記憶にあるか？
僕：はい！　深夜の二時半ごろです！
理性：ばかやろおおおおっガッツリ一〇時間以上も寝てんじゃねぇーかあああああっ！
僕：ひぃぃぃぃごめんなさあああいいいいっっ。

「ばぁぁっ　ばぁぁー　ばぁぁっ　ばぁぁー」

理性からの罵倒を顔面で受けている間、約十五分後。
僕はようやく約束の亀木商店街噴水前に到着する。
およそ人が出していい呼吸音ではない異音を、喉から醸しながら息を整えていると

「ねえ、ねえったら。いいじゃん俺らとあそぼうよ〜」
「もう二、三時間ぐらいたったんじゃね？　どうせ待ち合わせ相手ブッチしたんだ

よ」
「そうそう。俺らだったらそうはしないのになぁー。四人でさ、穴埋めしよ？」
「……」

口説く声特有の粘質感を持った声が、息継ぎの合間に聞こえてきた。
反射的にそこへ視線をむける。

大学生グループなのか、僕より大人っぽい服装なのにチャラい着こなしから気品を感じない、三人の男達が女の子に言い寄っているのが見えた。
肝心の口説かれている女性も、囲まれている圧からか一言も発さずこっちからでは表情一つ見えない。

ただならぬ状況。僕はそんな光景に一抹の不安が過り、すぐさま囲まれているその場所へ割って入る。

「――っと。？　なんだあんた」
「！　スズっ！」

嫌な予感は的中し、庇うように女性の――待ち合わせ相手の交傘（こうかさ）　者葉（ものは）の前に立つと二者二様の反応を向けられた。
そっと、もはちゃんが身体を僕に寄せてきたのを気配で感じる。

やっぱり怖かったんだ。
無理もない。自分より年上で、しかも複数人で迫られていたんだから。
何時間もそんな怖い目に合わせてしまったことに罪悪感が針となって心を突く。
それもこれも、僕が寝坊なんかしたから……。

「あ～～。もしかしてこの子の待ち合わせ相手、君？」
「すごい汗だし何その格好？　制服？　てか亀帆高校の生徒じゃね？」

腕をもはちゃんの前に出し、庇うように男達と対峙する。
もはちゃんにナンパをしていた男達は、イレギュラーの存在である僕に対し口々に反応した。

学校バレは制服を着てたら当然で、全ては自分の責任なのだから仕方がない。
だけど、汗で透けたワイシャツは予想外の不祥事の結果ゆえ余計に羞恥心が駆け巡る。

「それよりもさー、何時間も彼女を待たせておいてよく来れたね」

不躾な視線を一身に受けていると、痛い指摘が僕の胸を突き刺した。
事実であるがゆえ、何も言い返せない。

「俺が彼女だったらそんなことは」「ねぇ」

続く言葉に、しかし後ろから響く熱のない声が被さる。

「さっきから一々彼氏ヅラすんのやめて。うざいから」

鋭利な刃先から繰り出される一太刀によって場の空気が凍りついた。

「あと、さっきから言ってる待ち合わせの恋人が来たからもういくね。さようなら」

そう言うともはちゃんは、僕の腕を引っ張る。
日本刀のような気高さを纏ったもはちゃんに、されるがまま連れていかれる僕。

――え。こ、い……びと……恋人!?

身に覚えのないその発言によって、まるで死角から大砲が飛ばされてきたかのような衝撃が旋毛から全身に駆け巡った。先ほどまでの塗り広がった自己嫌悪が木っ端微

塵に吹き飛んだ。

え⁉　いっいつ、いつから⁉

顔に集まった熱をそのままに、バッともはちゃんを見る。
もはちゃんは素知らぬ顔で歩くばかりで、その端正な顔から真偽を見分ける事は出来なかった。

うぅぅぅ……。しょうがない。あとでそれとなく聞こう。

未だ火照った頬を、腕で隠すように歩いていると、視界端に映った男たちは皆一様に頬をピクピク震わせていて、反射的に僕はヤバいと感じとる。

「っおい。まだ話は終わってねぇだろ。調子に乗んなッ」

もはちゃんに掴まれた手とは反対の二の腕を掴まれる。さっきまでもはちゃんに向けていた甘い声とは一転した、怒気を孕んだ声が耳に直撃。

掴まれた腕から掛かる圧迫力がどんどん強くなっていき、赤くなるほど締め上げられる握力に瞼が痙攣した。

「――いやっ！　い、いたいっ」
「ちょっあばれんなッ！　……？　てかおまえ――」

パンっ

あまりの痛さに掴まれた腕を振るい払おうと上下に揺らす。
すると、手を叩くような破裂音がして左腕が解放された。

皮膚が熱く腫れるような鈍痛が残る、左二の腕をさすりながら音の発生源を見る

と、僕と男達を遮るようにもはちゃんが立っていた。

「さわんな」
「っ！」

今までに聞いたことのないほど冷え切った声が、僕の目の前で放たれる。
芯まで凍りついて、凍結した氷塊さえも一閃に斬り立つような威力を携えて。

「いこ」
「……」

背中越しにいる僕に向けたいつも通りの声。
夏風が吹く中で頬を優しく掠る涼風のような声が、不安に濡れた僕の心を乾かす。
僕たちはそのまま早足で商店街の方へと歩いて行った。

出端を挫かれるようなアクシデントに見舞われたが、お出かけは概ね達成した。

本来の目的である文化祭に必要な用具を買いに来た僕達は、商店街の雑貨店に立ち寄り目当ての物を見つけ無事購入。しかし、急いで家から飛び走ってきたため朝食を食べる時間なんてもちろんなく、商店から漂うスメルマーケティングの格好の的になり――

「それでね。学校の屋上なんだけど、フェンスの劣化で今危ない――」

ぐぅーーー

何と間の悪いことか、ちょうどもはちゃんが話している時に限って盛大な腹鳴がそれを遮る。

「「……」」

今までの会話が嘘のように静まり、僕のお腹を見るもはちゃんに全身の熱が顔に集まった。

あ。死にたい。

短歌の音数律をかなぐり捨てたようなストレートな一首。

名歌ならぬ迷歌を綴った僕に、しかしもはちゃんは微笑みながらも近くの喫茶店を調べ、連れて行ってくれた。

恥ずか情けなさすぎて涙が出た。

お腹を満たした僕達（殆ど僕）はキリのいい時間だった事もあり、そのまま解散した。家まで一直線に帰ってきた僕は、買った荷物を下ろし制服のままベッドに倒れ込む。
そして、内から込み上げる全ての衝動を全身で表現――暴れ回った。

「なあぁにやってんだああぼくはあああああ！！ッ」

せっかくもはちゃんと二人で買い物にいける幸運に恵まれたのに！
せっかくもはちゃんにいい格好見せたくてッ待ち合わせ場所で待つ算段だったのに！
せっかく……もはちゃんに楽しんで欲しくて……全部エスコートするはずだったのに……。

何時間も待たせた挙げ句、ナンパから守るどころか、僕の方が助けてもらった。
良いところなんて何一つない。ボンクラでカッコ悪いただの役立たずッ。
もはちゃんも、こんな僕に……きっと幻滅してる。

『はあ……何でスズなんかと買い物に来たんだろ？　こんな時間さえまともに守れないクランカーなんかと』
『男の格好なんだし、少しは友人である私を守ろうとは思わないの？　ほんとヘタレ』

あ、あれ。なんか、これはこれで、良いかも……。

『ふん。こんな腑抜けの雑魚虫を相手するぐらいなら、あの男らしい大学生達と一緒にいけばよかった。あーあ、今からでもあの人たちの所に――』
「そ、それはダメえええええぇぇぇ」
「!?　お、おい。大丈夫か……？」
「え、あ。お、お父さん……？　お、おかえり」
「ああ。ただいま。それで、何かあったのか？」
「あっだ、大丈夫！　あっ！　ごめんねお父さん！　まだ帰ってこないかと思ってご飯の準備できてない！　今作るね！」
「いや、早めに仕事が終わってから連絡してなかったからな。今日はお父さんが作るよ」
「え、良いの？　僕が作るよ？」
「まあ、なに。たまにはむす――子の為に料理を作るのも良いものだ。任せておけ」
「……うん。じゃあ楽しみにしてるね」
「ああ。……あと、だな」
「？」
「そろそろ文化祭、なんだろ？　お父さんその日、お得意さまとの仕事なんだが」
「……」
「急にお得意さまが日時を変えて欲しいとおっしゃってな。行けるようになったんだ」
「！」
「確かー、鈴音のクラスは喫茶店だったか。行っても、いいか？」
「も、もちろん！　そんなこと聞かないでよもおぉぉ！　」

「そ、そうか」

　扉越しから聞こえるお父さんの声は少し上擦っていて、物珍しさに少し笑ってしまう。

　文化祭は誰でも参加できるが、やっぱり親族が見にくる方が圧倒的に多い。
　かくいう僕のクラスも、親や兄弟が冷やかしにくるという話題で持ちきりだった。

　離婚により男手一つで育ててくれた父にはすごく感謝している。
　だから父も参加できる文化祭には、できれば来てほしかった。

　仕事で行けないと心底申し訳なさそうにしていた父だったけど……行けるようになったんだ。うれしい！

「楽しみだな。喫茶店ていうことは何か服装も揃えるのか？　例えば――」
「うん、着るよ。メイド喫茶だから〝執事服〟かな」
「そ、そう、なのか」

　声を弾ませ聞いてくる父に、僕はそれを遮るように答える。
　望んだ答えじゃなかったのかはたまた食い入るような返答に気分を害したのか。
　吃るように頷く父の声は、少しか細く揺れていた。

「ごめんお父さん。まだ少し、お腹が空いてないから先食べてて」
「……わかった。ラップしておくからちゃんと食べるんだよ？」

　喜色を帯びていた父の声が平面に収まる。
　突き放すような言葉だというのに、気を遣うような父の声にまた自己嫌悪が襲った。

　父は、本当に優しい。

だって男の格好をする娘に対し、理由を無理に聞かず見守ってくれているのだから。

……わかってる。
お父さんだって男の格好をする私に、少なからず蟠りを覚えていることぐらい。

けど、一度として無理矢理詮索してくるようなことはなく、僕はそれに甘えてばかり。
無償の愛情だって罅は入るし、傷つく事だってある。
それに溺れてなおざりにして……とんだ親不孝者だ。

――でも、ごめんなさいお父さん。僕はもう、娘に戻れない。

ベッドに顔を埋め、横目で辺りの部屋模様を覗き見る。
年季の入ったタンスに小さな丸机。お庭と繋がった掃き窓に同じ高さぐらいのクローゼット――と、見晴らしの良すぎる簡素な光景に、僕はそっと目を背けた。